

風景構成法の客観的解釈に関する検討

— ロールシャッハ包括システムおよび GHQ との関連から —

加納 信吾* 石井 雄吉**

風景構成法の読み解きは、臨床家の個人的な経験に依存する部分が多い。さらに、本法は投影法であるため、臨床における関係性とその作品や解釈に大きく影響を及ぼしているため、その読み解きはなおさら複雑となっている。しかし、そうであるからこそ、本法の解釈にあたっては、恣意的な解釈を避けるためにも、その指針となるような枠組みが必要となってくる。

そこで、本研究では、風景構成法の数量化により標準化された心理検査との関連を検討可能にした LMTCL を用いて、同法の客観的な解釈について、ロールシャッハ法（包括システム）および GHQ との相関関係から検討した。

Spearman の順位相関係数を求めた結果、LMTCL 項目と包括システム変数・GHQ 下位尺度とに多くの強い関連が認められた。そこで、type I error を回避するために、 $r = \pm .4$ 以上で、かつ無相関検定の有意確率 1% 水準以上の結果を対象に限定して若干の考察を加えた。

キーワード：風景構成法、数量化、ロールシャッハ、GHQ

風景構成法とその読み解きについて

風景構成法 (The Landscape Montage Technique, 以下 LMT) は、医療域だけでなく教育相談やスクールカウンセリングといった教育現場においても、その有用性が数多く報告されている (e.g., 原, 2004, 鷺岳, 2006, 神崗, 2011)。しかし、本法を心理検査法としてみた場合、投影法の中の描画法に属しているため、被検者の反応の自由度はきわめて高く、そのため読み解く側の客観性はきわめて低いものとなる。実施は比較的容易であるものの、描画という多義的な反応について判断するにあたっては熟練を要し、これまで LMT の解釈には決まった指標が存在せず経験と直感に頼ることが多くなる (鷺岳, 2006)。

さらに、LMT はその性質上、描き手とそれを見守る治療者との関係性を土台としているために、その相互作用から生み出される結果の読み解きには様々な要因が複雑に入り組んでおり、基礎的な読み解きの指標ができにくい側面がある。しかし、その読み解きに関する信頼性を高め、技法に熟達していくためには、描画を読むための何らかの指標や手がかりを知ることも重要な手法である (鷺岳, 2006)。言い換えると、LMT の読み解きに関して、実際には客観的指標なしに作品から書き手のメッセージを汲み取ることは困難であり、恣

意的な解釈によって逆に描き手のメッセージを遠ざけてしまう危険性を孕むことになる (神崗, 2011)。

このように、LMT の読み解きには何らかの手がかりが必要となるが、他技法との比較は、そうした手がかりの発見に寄与するのである (鷺岳, 2006)。しかも、LMT の表現が持つ独自性や可能性をさらに広げるためにも、他技法との比較が必要である (原, 2004)。

これまで LMT と他技法との比較についての研究は、バウムテスト、P-F スタディとの比較 (大石, 1988)、Y-G 性格検査、統合型 HTP との比較 (皆藤, 1994)、箱庭療法との比較 (皆藤, 1994・井原, 1993) があげられる。こうした LMT と他技法との比較研究のほとんどは、心理療法過程およびその中で心的状況を理解する目的でなされたものである。ただし、LMT が投影法の一技法である以上、そこにどうしても客観的な枠組みが必要となるが、この辺りについてはまだ十分な成果を上げていたとは言えず、この点からの検討が必要である (皆藤, 2008)。しかし、これまでの LMT 研究はその解釈に質的側面が強く置かれてきていることから、数量化や他の量的指標との関連による検討が少ない (皆藤, 1994)。

数量化風景構成法とその課題について

LMT における数少ない量的研究の方法として、数量化 LMT チェックリスト (Landscape Montage Technique Check-List, 以下 LMTCL) (石井・杉山・岩崎・白井・緒

* 明星大学心理相談センター

** 明星大学人文学部心理学科

方,1999)があげられる。もともと LMTCL は、精神科 Day Treatment 参加者の社会復帰へ向かう精神科リハビリテーションの目安として、チェックリスト方式による数量化の手法を LMT に導入したものである(石井他,1999)。

LMTCL (石井他,1999)は LMT における指定描画アイテムごとに、精神科患者と健常者との間で有意差のあった描画指標が設定されており、LMT の描画内容が該当指標に合致すれば1点加算される採点システムとなっている。その結果、LMTCL の得点は風景が自然に描かれるほど高得点となり、統合失調症者を中心とする臨床群(統合失調症者16例、高機能自閉性障害者1例)の平均は23.12点、健常群の平均は36.67点であり、両者の境界は30点に設定されている(石井他,1999)。

この LMTCL は、統合失調症者以外にも、精神的健康度を幅広く測定可能な GHQ 28 精神健康調査票(The General Health Questionnaire, 以下 GHQ) (長谷川,2004)とのテストバッテリーから、GHQ の下位指標(身体的症状・不安と不眠・社会的活動障害・うつ状態)のうち、特にうつ状態に対する感度が高いとの報告がある(加納・堀・石井,2010)。しかし、LMTCL の下位指標とうつ状態との関連についての考察までには至っていない。

LMTCL とのテストバッテリーについて

LMT という非言語的な手法にみられる諸特徴の意味を考察し、それらについて仮説を作っていくためには、既に多くの仮説が実証されている心理検査の結果と比較することも必要である(弘田他,1990)。そのような関連性を多角的に検証可能な検査の一つにロールシャッハ法がある。

このロールシャッハ法には多くの実践技法が開発・施行されているが、とりわけ、包括システム(Comprehensive System, 以下 CS) がグローバル・スタンダードとなっている(津川,2005)。CS の各変数と LMT とを比較していくことにより、客観的視点から LMT にみられる描画特徴を意味付けることが期待される(高桑,2005)。

したがって、数量化されたアセスメント・ツールである LMTCL と実証的な研究から導き出された解釈を行う CS との関連性を検討することは、LMTCL 各指標が反映する解釈仮説の構築に繋がるものと期待される。

さらに、既述のように、LMTCL と GHQ との比較検討では、LMTCL 各指標が反映する要素についての考察までには至っていない。したがって、LMTCL と

GHQ との関連について、LMTCL 下位指標を通して再考することで、LMT のより客観的な読み解きが可能になるものと思われる。

そこで、本研究では、本法と CS および GHQ との関連から、LMTCL 各項目が反映する解釈の指針を検討した。これにより、LMTCL は従来の質的・経験的解釈を補佐する一助となり、LMT を質的・量的観点を含めた相補的視点からの人間理解に繋げられることが期待される。

方 法

1. 対象と検査の施行

対象は研究に協力しない場合でも不利益を被らないことなど研究に関する説明を受け、同意書にて協力を承諾した大学生および大学院生40名(平均年齢22.12歳 SD=2.81)であった。検査の実施は、ロールシャッハ法、LMT、GHQ の順で個別法にて行った。

2. 結果の処理方法

まず LMT を LMTCL に従い数量化し、LMTCL 総合得点および下位指標(各描画アイテム・チェック項目)の各得点を算出した。CS のコード化については、藤岡(2004)および高橋・高橋・西尾(2009)に準拠して行った。また、H:(H)や、W:M といった比で示される変数については、右辺の値を分母、左辺の値を分子として除しその値を用いた。つまり、除した値が1よりも大きいほど、元の比では左辺の値が右辺の値より大きいことを示すことになる。

このようにして算出された LMTCL 各指標と、CS の各変数・特殊指標との相関を Spearman の順位相関係数により求めた。なお、Spearman の順位相関係数を用いたのは、一般に CS 変数および LMTCL 各変数ともに正規分布が仮定されていないためである。

結 果

相関係数を算出した結果、LMTCL 各指標と CS 変数および GHQ 各尺度との間に、多くの相関関係がみられた。ただし、本研究においては、統計における type I error を防ぐために、考察の対象とする相関は、「比較的相関関係がある」と言える $r = \pm .4$ 以上で、かつ母集団における再現性を担保するため、無相関検定の有意確率が1%水準以下で認められたものだけに限定した。

1. LMTCL チェック項目と CS 変数との相関関係について

LMTCL チェック項目と CS 変数との間については、

LMTCL 全チェック項目と CS 変数とに相関が認められた (Table 1-1, 1-2, 1-3)。

2. LMTCL 描画アイテム・全体評価・合計点・総合得点と CS 変数との相関について

LMTCL 描画アイテム・全体評価・合計点・総合得点と CS 変数との間については、川を除く LMTCL アイテムと CS 変数とに相関が認められた (Table 2-1, 2-2)。

3. LMTCL チェック項目と GHQ 尺度との相関について

LMTCL のチェック項目と GHQ 尺度との間については、LMTCL 全チェック項目と GHQ 尺度とに相関が認められた (Table 3)。

4. LMTCL アイテム項目及び合計点・全体評価・総合得点と GHQ 尺度との相関について

LMTCL アイテム項目および合計点・全体評価・総合得点と GHQ 尺度との間については、山・道を除く LMTCL アイテム項目と GHQ 尺度とに相関が認められた (Table 4)。

Table 1-1 LMTCL チェック項目と CS との相関 その 1

LMTCL チェック項目	CS 変数 (当該クラスター)	r
遠近感・立体感	S-(媒介)	-.598***
	P(媒介)	.500**
	X+(媒介)	.437**
	M-(思考)	-.468*
	XA%(媒介)	.400*
着色	S-(媒介)	-.647***
	Mp(思考)	-.450**
	M-(思考)	-.652***
	3r+(2)/R(自己知覚)	.442**
	(H)+Hd+(Hd)(自己知覚)	-.456**
	GHR(対人知覚)	.423***
自然な着色	HumanCount(対人知覚)	.434**
	XA%(媒介)	.480**
	S-(媒介)	-.693***
	M-(思考)	-.603***
多色	3r+(2)/R(自己知覚)	.469**
	S-(媒介)	-.494***
	P(媒介)	.545***
	BlendsR(感情)	.518***
	3r+(2)/R(自己知覚)	.504***
	AG(対人知覚)	-.535***

*p<.01 **p<.005 ***p<.001

Table 1-2 LMTCL チェック項目と CS との相関 その 2

LMTCL チェック項目	CS 変数 (当該クラスター)	r
性質・特徴の表現	S-(媒介)	-.495**
	H:(H)(自己知覚)	.477**
	H(自己知覚)	.407*
動き	W:M(情報処理)	.551***
	P(媒介)	.412**
	Mp(思考)	.427**
	EB 左辺(統制)	.498*
	EA(統制)	.550***
	H:(H)(自己知覚)	.465**
	H(自己知覚)	.513**
	GHR(対人知覚)	.552***
	PureH(対人知覚)	.520***
	CDI(特殊指標)	-.548***
	陰影表現	D(情報処理)
S(感情)		.593***
R(統制)		.598***
EB 左辺(統制)		.423**
EA(統制)		.430**
H(自己知覚)		.484**
GHR(対人知覚)		.552***
HumanCount(対人知覚)		.401**
PureH(対人知覚)		.514**
HVI(特殊指標)		-.662***

*p<.01 **p<.005 ***p<.001

Table 1-3 LMTCL チェック項目と CS との相関 その 3

LMTCL チェック項目	CS 変数 (当該クラスター)	r
非記号化	Dd(情報処理)	.556***
	XA%(媒介)	.592***
	WDA%(媒介)	.561***
	X-(媒介)	-.468**
	S-(媒介)	-.531***
	P(媒介)	.482**
	M-(思考)	-.481**
付加物	FC(感情)	.466**
	R(統制)	.515***
	S-(媒介)	-.485**
	3r+(2)/R(自己知覚)	.474**
	COP(対人知覚)	.461**

*p<.01 **p<.005 ***p<.001

Table 2-1 LMTCL 描画アイテムと CS 変数との相関

LMTCL アイテム項目	CS 変数 (当該クラスター)	r
山	BlendsR(感情)	.563***
	AG(対人知覚)	-.554***
道	MOR(思考)	-.423**
家	S-(媒介)	-.420*
人	XA%(媒介)	.515**
	WDA%(媒介)	.508**
	X+(媒介)	.406**
	M-(思考)	-.423**
	S-(媒介)	-.661***
	P(媒介)	.575***
	H(自己知覚)	.432*
	H:(H)(自己知覚)	.560***
	COP(対人知覚)	.406**
	CDI(特殊指標)	-.491**
動物	S-(媒介)	-.429*
	H(自己知覚)	.419*
追加物	S-(媒介)	-.636***
	P(媒介)	.625***
	M-(媒介)	-.469**
	3r+(2)/R(自己知覚)	.431*
	H:(H)(自己知覚)	.420**
	COP(対人知覚)	.411**

* $p < .01$ ** $p < .005$ *** $p < .001$ **Table 2-2** 合計点・全体評価・総合得点と CS 変数との相関

LMTCL チェック項目	CS 変数 (当該クラスター)	r
合計点	S-(媒介)	-.626***
	P(媒介)	.559***
	M-(思考)	-.477**
	H(自己知覚)	.412*
	H:(H)(自己知覚)	.461*
	AG(対人知覚)	-.415**
	XA%(媒介)	.423**
全体評価	S-(媒介)	-.619***
	P(媒介)	.404*
	M-(思考)	-.541**
	GHR(対人知覚)	.452**
	CDI(特殊指標)	-.411*
総合得点	S-(媒介)	-.645***
	P(媒介)	.548***
	M-(思考)	-.491***
	3r+(2)/R(自己知覚)	.404**
	H(自己知覚)	.403**
	H:(H)(自己知覚)	.445**
	AG(対人知覚)	-.412**

* $p < .01$ ** $p < .005$ *** $p < .001$ **Table 3** LMTCL チェック項目と GHQ 尺度との相関

LMTCL チェック項目	GHQ 尺度	r
遠近感・立体感	GHQ28合計点	-.487**
	社会的活動障害	-.404**
	うつ状態	-.639***
着色	GHQ28合計点	-.620***
	身体的症状	-.422**
	社会的活動障害	-.461**
	うつ状態	-.589***
自然な着色	うつ状態	-.511**
性質・特徴の表現	GHQ28合計点	-.580***
	社会的活動障害	-.570***
	うつ状態	-.690***
動き	うつ状態	-.467**
非記号化	うつ状態	-.467**
付加物	社会的活動障害	-.460**
	うつ状態	-.630***

* $p < .01$ ** $p < .005$ *** $p < .001$ **Table 4** LMTCL アイテム項目・合計点・全体評価・総合得点と GHQ 尺度との相関

LMTCL アイテム 項目及び 合計点・全体評価・ 総合得点	GHQ 尺度	r
川	うつ状態	-.425**
家	うつ状態	-.448**
人	GHQ28合計点	-.597***
	社会的活動障害	-.622***
	うつ状態	-.738***
動物	うつ状態	-.544***
追加物	GHQ28合計点	-.591***
	社会的活動障害	-.518**
	うつ状態	-.731***
合計点	GHQ28合計点	-.537***
	社会的活動障害	-.495**
	うつ状態	-.734***
全体評価	GHQ28合計点	-.411*
	うつ状態	-.606***
総合得点	GHQ28合計点	-.530**
	社会的活動障害	-.489**
	うつ状態	-.740***

* $p < .01$ ** $p < .005$ *** $p < .001$

考 察

1. 相関がみられた LMTCL チェック項目と CS 変数について

1-1 遠近感・立体感について

LMTCL チェック項目の遠近感・立体感では、媒介クラスターの S⁻($r=-.598$), P ($r=.500$), X+ $\%$ ($r=.437$), XA $\%$ ($r=.400$)とに、それぞれ正負の相関がみられた (Table 1-1)。

S⁻の高さは怒りや恨みなどの負の感情によって現実検討能力の低下に繋がりがやすいことを示している (高橋ら, 2007)。また, X+ $\%$ は現実をどれだけ正しく認知しているかを反映する変数であり, XA $\%$ は慣習的な行動がとれるかを表わしている (吉村, 2008)。同様に平凡反応である P は, 慣習的・常識的な思考様式を表わす変数である (岸川・南里・西田・正木・上田・福居, 2003)。

したがって, 遠近感・立体感は, 感情体験を適切に調整できているか, または社会的要求に基づいた思考や現実検討能力がどれほど保たれているかを反映している可能性がある。

1-2 着色について

着色では, 媒介クラスターの S⁻($r=-.647$), 思考クラスターの M⁻($r=-.450$) とに負の相関がみられた (Table 1-1)。怒りによる衝動性を示唆する S⁻, そして, 自己欲求に従う傾向が高すぎるために対人関係に失敗しやすい M⁻は, 共に認知の歪みを示す変数である (高橋・高橋・西尾, 2007)。

また, 着色は自己知覚クラスターの 3r+(2)/R ($r=.442$) や対人知覚クラスターの GHR ($r=.423$) とに正の相関がみられている (Table 1)。3r+(2)/R は自己への関心の程度を示しており, GHR は他者への現実的な関心と肯定的な興味を持ち, 置かれた場面に応じて適切な対人行動がとれるかを示す変数である (Exner, 2000 中村・野田監訳 2002)。

LMT において着色を行うことにより, 肯定的な感情体験を促し, 絵が下手だという描画能力に対する低い自己評価を高めることができる (運上・橋・長谷川・中村, 2010)。本結果からも着色は自己への関心に繋がるとともに, 良好な対人知覚も反映しており, 自己ならびに他者に対する関心の程度と関連すると考えられる。

1-3 自然な着色について

自然な着色では, S⁻($r=-.693$), M⁻($r=-.603$), 3r+(2)/R ($r=.469$), XA $\%$ ($r=.480$) とにそれぞれ正負の相関がみられた (Table 1-1)。

ところで, LMT の着色には, 肯定的側面以外に生の感情が引き出されてしまう危険性がある (運上他, 2010)。それは粗雑な色塗りや, 妄想型統合失調症患者に特有なヘテロクロマチズム (Heterochromatism) という現実には相応しくない不自然で奇妙な色の選択などといった彩色である (高江洲・大森, 1984)。このような表現がみられた場合, 描き手は否定的感情に翻弄されている状態であり, 生の感情統制が出来ずにいることが多い (運上他, 2010)。

本研究から, LMTCL における自然な着色は, 描き手の認知的側面を反映し, 特に怒りや恨みなどの否定的感情の統制や, 対人認知を反映する項目であることが考えられる。したがって, XA $\%$ はより状況に即した行動をとれるかといった現実検討能力を反映している (Exner, 2000 中村・野田監訳 2002) ように, 自然な着色の失敗は適切な判断力を失っている状況を示す可能性がある。

1-4 多色について

多色では, S⁻($r=-.494$), P ($r=.545$), 3r+(2)/R ($r=.504$) に加え感情クラスターの BlendsR ($r=.518$) と対人知覚クラスターの AG ($r=-.535$) とにそれぞれ正負の相関がみられた (Table 1)。

BlendsR は「心理的複雑さ (適度であれば成熟性)」の程度を示しており, 刺激に対して適切な注意を向け, 思考と感情をとともに働けるかどうかを示す変数である (高橋他, 2007)。AG は他者との関係を競争的と捉える態度に関連する変数である (高橋他, 2007)。この AG は自己主張的な意味合いを含んでおり, 適応的側面を持つが, 反面 AG の過度な高さは対人関係を攻撃・非攻撃の関係として知覚しやすいという危険性を示す。

しかし, 本研究で得られた AG の平均値 (0.32) は期待値 (高橋他, 2007) の範囲内であることから, AG の肯定的側面を反映しているものと考えられる。したがって, 情緒表現の豊かさを反映するアイテムへの多彩色は, S⁻の怒りによる衝動性や AG の攻撃性を抑え, 3r+(2)/R の自己への関心や BlendsR の心理的な成熟性を反映している可能性がある。

1-5 性質・特徴の表現について

性質・特徴の表現では, 自己知覚クラスターの H ($r=.407$) とに正の相関がみられた (Table 1-2)。

H は人に対する関心の程度を示し, 自己イメージや自己評価の形成に肯定的な対人関係が寄与していることを表わす変数である (Exner, 2000 中村・野田監訳 2002)。また, 本研究ではその他に H : (H) ($r=.477$) においても正の相関がみられ, 性質・特徴の表現得点が

高くなるほど、Hが(H)に比べ高くなっている(Table 1-2)。Hが現実に基づいた理解と関心の程度を表わす一方、(H) (想像された人間全体反応)は他者を客観的・現実的に理解しないで想像により捉えがちなことを示す変数である(高橋他, 2007)。

したがって、性質・特徴の表現は、対人関係における興味関心、かつ現実的な対人関係で他者と交流ができていくかどうかの程度を示唆していると考えられる。

1-6 動きについて

動きでは、まず情報処理クラスターであるW:M ($r=.551$)とに正の相関がみられた。動き得点が高くなるほどWの値がMの値より高くなった(Table 1-2)。

W:Mは、課題達成への努力(W)とそれを実現するために利用可能な資質(M)とのバランスを示す変数と解釈されている(藤岡, 2004)。そのため、動き得点の高い者は目標水準達成に向けて必要以上の努力をしていることが推察される。

その他、本研究では、統制クラスターであるEA ($r=.550$)とに正の相関がみられた(Table 1-2)。EAは、意思決定や問題解決を適切に行うための資質や対処能力を示しており(高橋他, 2007)、社会生活に対処する能力のなさを示すCDI ($r=-.548$) (高橋他, 2007)とも関連している。

さらに、H ($r=.513$)やGHR ($r=.552$)などの自己に対する良好なイメージや適切な対人行動とも正の相関がみられるように、LMTCLの動きは現実場面における対人交流を含んだ問題解決能力や、その資質を反映している可能性がある。

1-7 陰影表現について

陰影表現では、情報処理クラスターのD ($r=.521$)、統制クラスターのR ($r=.598$)、感情クラスターのS ($r=.593$)などとに正の相関がみられた(Table 1-2)。Dは物事を具体的・客観的に眺める傾向を表わしており(高橋他, 2007)、Rは生産性や心的エネルギーの高さを示している(Exner, 2000 中村・野田監訳, 2002)。また、多すぎるSは頑固さや自己主張的な反抗的態度、怒りを適切に処理できないことを表わしている(高橋他, 2007)。しかし、適度なSは意志の強さや自己決定性を示していることが多く(高橋他, 2007)、本研究で得られたSの平均値(3.07)は期待値(高橋他, 2007)の範囲内であることから、Sの肯定的な意味合いが反映されたものと考えられる。

つまり、Sは空白反応という名のとおり、ロールシャッハ法のインクプロットそのものではなく背景の領域に目を向けているので、通常とは異なる角度から

刺激を眺めるという態度にも関連するのであろう。

LMTCLにおける描画アイテムの陰影表現は、D、R、Sが示す活発な精神活動として現実を客観的に吟味し把握する能力を反映しているのではないだろうか。

1-8 非記号化について

非記号化では、情報処理クラスターのDd ($r=.556$)、XA% ($r=.592$)、WDA% ($r=.561$)、P ($r=.482$)をはじめとした媒介クラスター、感情クラスターのFC ($r=.466$)と統制クラスターのR ($r=.515$)などとに正の相関がみられた(Table 1-3)。

まず、Ddは課題解決にあたって情報を取り入れる時に通常とは異なるアプローチをする傾向を示す(高橋他, 2007)。そして、適度なDdは環境への反応の仕方に可逆性があり、良い意味での完全性を反映している(高橋他, 2007)。本研究で得られたDdの平均値(3.27)はその期待値(高橋他, 2007)の範囲内であることから、このような解釈に準じた意味づけができるであろう。

XA%とWDA%の高さは現実検討力を備え、慣習的な行動がとれることを表わしており、一般的な現実対処能力を反映している(Exner, 2000 中村・野田監訳, 2002)。またFCは衝動の統制を行いつつ、感情を適度に表現できるといった情緒の安定性を示している(高橋他, 2007)。さらに、この非記号化(豊かな表現)は心的エネルギーを表わすRとも正の相関関係にあることから、活発な精神活動に基づくものと考えられる。

したがって、非記号化得点の高さは、描き手の精神エネルギー、情緒の安定性、現実検討能力、対処力を反映している可能性がある。

1-9 付加物について

付加物では、S- ($r=-.485$)と $3r+(2)/R$ ($r=.474$)に加えて、対人知覚クラスターであるCOP ($r=.461$)とにそれぞれ正負の相関がみられた(Table 1-3)。

COPは対人交流への肯定的な見方を反映した変数である(吉村, 2008)。そのため、豊かな付加物の表現はS-が示す衝動性を統制し、 $3r+(2)/R$ の肯定的な自己評価や、COPの他者への協力的態度に繋がりがやすいのではないかと考えられる。

2. 相関がみられたLMTCL描画アイテム及び全体評価・合計点・総合得点とCS変数とについて

2-1 山について

LMTCL描画アイテムの山では、BlendsR ($r=.563$)とAG ($r=-.554$)とにそれぞれ正負の相関がみられた(Table 2-1)。

従来の山に対する解釈仮説によると、山は理想と現実の隔たりを表わしていることが多く、乗り越えねば

ならぬ問題を示唆している（伊集院・中井, 1988）。本研究で相関関係が得られた BlendsR は、思考に介入する感情の程度を示唆する変数である（高橋他, 2007）。また、適度な AG は既述のように自己主張的な意味合いを含んでおり、適応的側面を持っている（高橋他, 2007）。

したがって、LMTCL で山得点が高くなるほど、自身の課題に対し客観性と自己主張性を持って行動できるといった適応面を反映していると考えられる。

2-2 道について

道では、思考クラスターの MOR ($r=-.423$) とに負の相関がみられた (Table 2-1)。MOR は、否定的・悲観的な自己イメージの見方を示しており、抑うつとも関連する（高橋他, 2007）。

従来の道に関する知見によると、道は山に向かう道や川と直行する道など様々な形態をとり、意識の象徴であると共に人生の目標であると解釈されている（大石, 1988）。

したがって、LMTCL 道得点の低下は人生の目標に対する不安や否定的自己イメージを反映している可能性があると考えられる。

2-3 家について

家では、媒介クラスターの S ($r=-.420$) とに負の相関がみられた (Table 2-1)。家は描画者が成長してきた家庭状況を表わし、自分が育った家庭や家族関係を表現しているといわれている（大石, 1988）。S は外界への反抗や怒りの感情を抱きやすいことから（Exner, 2000 中村・野田監訳 2002），LMTCL 家得点の低さは、描画者の家族関係に加えて外界との交流に対する困難さを示唆しているのかもしれない。

2-4 人について

人アイテムに関しては、しばしば描くことを拒否されたり、拒否されなくても stick figure (棒人間) という線描写のみの図式的な表現で処理されたり、彩色されずに白抜きになることが多いとの指摘もある（山中, 1984）。このことから人アイテムは抵抗の強い対象であると言える。さらに、人物像は極めて意識レベルの強い自己像の投影と解釈される（三浦, 2003）。そのため、LMT における人の表現には、描き手の心的エネルギーが強く求められると思われる。

また、本研究において、人は LMTCL 描画アイテムの中で CS 変数との相関が最も多くみられた (Table 2-1)。さらに人アイテムは現実検討力と、慣習的な行動がとれることを表わしている XA% ($r=.515$)、WDA% ($r=.508$)、X+% ($r=.406$)、現実対処能力を示す P ($r=.575$) とに正の相関がみられた (Table 2-1)。この結果か

ら LMTCL 人アイテムは現実世界における検討能力ないしは対処能力を反映すると推察される。

また、H : (H) ($r=.560$) と COP ($r=.406$) とに正の相関が、S ($r=-.661$) と CDI ($r=-.491$) とに負の相関がみられた (Table 2-1)。そのため、LMTCL の人得点の高さは、他者への肯定的な関心や現実的な理解から、成熟した人間関係を築けていることを反映していると考えられる。LMT の「人」アイテムが豊かに表現されるためには、多角的に分析されるべき性質を備えた心理的要素が必要であると指摘されている（澤田・内田・宮下, 1993）。LMTCL 描画アイテムの人が本研究で多くの CS 変数と関連性を導き出せたのは、人アイテムが現実検討能力ないしは、豊かな対人関係など多角的な性質を包含しているためであると考えられる。

2-5 動物について

従来の知見をみると、動物は潜在するエネルギーの程度と解釈されている（山中, 1984）。さらに、「人を拒否した人も、動物は描く人が多い。人はなかなか信用できないけど、動物は裏切らないからであろうか。あるいは物言わぬ動物にひっそりと自分を託しているのかもしれない（山中, 1984）」との指摘もある。

動物では、H ($r=.419$) と S ($r=-.429$) とにそれぞれ正負の相関がみられた (Table 2-1)。これは人アイテムにも共通して関連性がみられた CS 変数であり、衝動性の抑制と、人間への関心を示唆している。

したがって人アイテムほど複合的な意味合いでないが、動物は人に代わる第二の自己像投影として衝動性の統制、人間への関心を反映しているのかもしれない。また、ロールシャッハ法における動物の意味付け（Exner, 2000 中村・野田監訳 2002）も解釈上参考になろう。

2-6 追加物について

追加物は描画者の自由裁量に任された、描画アイテムである。そのため、追加物は「空白部分を埋め風景としてのバランスを保つ」、「プロセスが進むにつれてのズレを修正する」、「描き手のイメージを記号的に具象化する」、「見守り手に自分のイメージを伝える」という特徴もある（那須, 2009）。

本研究では、追加物と S ($r=.636$)、P ($r=.625$)、M ($r=-.469$)、3 r + (2)/R ($r=.431$)、H : (H) ($r=.420$)、COP ($r=.411$) とにそれぞれ正負の相関がみられた (Table 2-1)。S、M は認知の歪みの程度を示しており、追加物とは負の相関となっている。そのため、豊かな追加物の構成がなされるほど、描き手は物事との適度な距離感を保ち、外界を客観的に捉えられているものと推察され

る。この結果はまさに CS 変数からも示された通り、描画者の認知的側面を把握する項目であることが考えられる。

さらに、「描き手のイメージを記号的に具象化する」、「見守り手に自分のイメージを伝える」といった解釈(那須, 2009)は、CS 変数の $3r+(2)/R$ が示す自己への関心と自尊心の程度(Exner, 2000 中村・野田監訳 2002)と関連すると考えられる。

したがって追加物は、LMT プロセスのなかでの認知的側面および自己イメージを示唆しているものと推察される。

2-7 合計点について

描画アイテムおよびチェック項目得点の合計点では、 $S-(r=-.626)$, $M-(r=-.477)$, $P(r=.559)$, $H(r=.412)$, $H:(H)(r=.461)$ とにそれぞれに正負の相関がみられた (Table 2-2)。この結果から LMTCL 合計点の高い者は、人アイテムで既に指摘したように、怒りや恨みなどの否定的感情に振り回されず、かつ現実的な他者認知ができるといった現実検討能力を有していることが考えられる。さらに、 H , $H:(H)$ との正の相関から、自己および他者に対する肯定的な関心があり、かつ想像ではなく現実に基づいた他者理解に繋がっているものと思われる。

また、合計点は上記の CS 変数の他に $AG(r=-.415)$ と負の相関関係にあった (Table 2-2)。したがって、風景が自然に描かれる(合計点が高くなる)ほど、内面に不安定な状況が生じて、それが他責的な形として表われにくい安定したパーソナリティを反映すると言える。

2-8 全体評価について

全体評価では、 $S-(r=-.626)$, $M-(r=-.477)$, $P(r=.404)$ に加えて $XA\%(r=.423)$, $GHR(r=.452)$, $CDI(r=-.411)$ とにそれぞれ正負の相関がみられた (Table 2-2)。

$XA\%$ は客観的な状況判断能力を示す変数である (Exner, 2000 中村・野田監訳 2002)。また、 GHR は対人関係における他者からの肯定的評価に繋がりやすい変数である (高橋他, 2007)。さらに、 CDI が高い者は社会生活を送る上でのスキル不足に加えて、他者との適切な距離感が掴めずに成熟した人間関係を形成することが困難であると言われている (高橋他, 2007)。

LMTCL 全体評価項目は、視点の整合性、配置の実現性、全体に見合う適度な大きさ、季節の整合性、項目以外の地の部分に色付けの項目から構成されており、風景全体からみた描き手の認知的側面をみる項目となっている。

本研究から全体評価は客観的認知に基づいた、特に

対人関係における適切な距離感の程度や、否定的感情の統制力を反映している可能性がある。

2-9 総合得点について

総合得点では、合計点で見られた CS 変数に加えて、 $3r+(2)/R$ ($r=.404$) とに正の相関がみられた (Table 2-2)。これは自己への関心から自尊心の程度を示唆している (藤岡, 2004)。総合得点は合計点と全体評価得点とを総計した変数であるが、全体評価でみられた対人関係における適度な距離感に加え、自分自身へのより適切な客観視にも繋がっているものと思われる。

その他、 $S-(r=-.645)$, $M-(r=-.491)$, $P(r=.548)$ の媒介および思考クラスター、 $H(r=.403)$, $H:(H)(r=.445)$, $3r+(2)/R$ ($r=.404$) といった自己、そして、対人知覚クラスターとに相関がみられた (Table 2-2)。 $S-$, $M-$, P は否定的感情や現実離れた対人知覚、慣習に基づいた社会的判断能力等が問われる変数であり、現実検討能力を反映している。 H , $H:(H)$, $3r+(2)/R$ は自己と他者との関係性を示しており、合計点と AG との負の関連を含めて、関心の程度や適切な距離感といった肯定的な対人関係の反映を表わしている。

したがって、総合得点は全体的構成の程度から認知的側面を測ると共に、現実検討能力、感情統制、そして、自己と他者への関心の程度といった対人関係性を含む多角的な視点を有した指標であると推察される。

2-10 CS 変数と関連がみられなかった川について

本研究では、LMTCL 描画アイテムの中で唯一、川アイテムにおいてのみ CS 変数との相関がみられなかった。つまり、本研究をみる限り、CS 変数が明らかにする心理的仕組みや機能と、LMTCL 川アイテムに反映される心理とは、一方からもう一方を予測しようような関係にないのかもしれない。したがって、LMTCL 川アイテムは CS 変数とは異なる次元の心理的側面を備えている可能性があると推察される。

これまで川については、最初に川を提示され真っ白な紙面を二分することによる精神的負荷のかかる状況下において、自我が十分に対応できるかどうかで、その描き方が変わるとの指摘がある (山中, 1984)。さらに、「LMT で最初に提示されるアイテムは川であるが、これにより構成上の困難が設定されることとなり、その困難に対する描き手の処理の在り方に、描き手の自我の強さを見ることが出来る (高桑, 2005)」という見解もある。

そもそも、川は風景における個々のアイテム間の位置の関連性からの読み解きが重要である (皆藤, 1994)。このように、川は LMT のアイテムの中で、全体配置

における関係性が最も考慮される必要のあるアイテムであり、その読み解きには様々な要因が複雑に関与しているのかもしれない。

そのように考えると、本研究で川アイテムとCS変数との関連性がみられなかったのは、両者が異なる次元の心理的側面を持ち合わせていたのとは別に、川の配置および他アイテムとの位置的関連を読み取る項目等が、LMTCLに設けられてなかったためであるのかもしれない。したがって、この関係性の点はLMTを数量化する上で、今後の大きな課題であると言える。

3. 相関がみられたLMTCLチェック項目とGHQ尺度とについて

LMTCLの得点はLMTが自然に描かれるほど高得点となることに対して、GHQでは精神的健康度が高いほど各項目の得点が低くなるという逆転関係にある。本研究で得られた両者間の相関係数はすべて負の相関となっており、その逆転関係が実によく反映された結果である (Table 3)。

これは先行研究 (加納他, 2010) と同様の結果でもあり、やはり、LMTCLは精神的健康度の低下からもたらされるうつ状態に対して非常に感度が高いと言える。

また、LMTCLチェック項目の中でも、特に着色および自然な着色はGHQ 28 合計得点・身体的症状・社会的活動障害・うつ状態のGHQ 5項目 (合計点含む) 中4項目との関連性がみられている。

したがって、特に着色や自然な着色得点の低さは、過度の疲労や体調不良、日常生活における活動上の何らかの失敗や、またはうつ状態に苛まれているなどの精神的健康度の低さからもたらされる問題を如実に反映している可能性が考えられる。

引用文献

- Exner, J. (2000): A Primer For Rorschach Interpretation. (エクスナー, J. E. Jr. 中村紀子・野田昌道 (監訳) ロールシャッハの解釈 (第6版) 中村紀子・野田昌道 (監訳), (2002). ロールシャッハの解釈 金剛出版)
- 藤岡淳子 (2004): 包括システムによるロールシャッハ臨床 エクスナーの実践的応用 誠信書房
- 長谷川恵美子 (2004): GHQ 精神健康調査票 氏原寛・岡堂哲雄・亀口憲治・西村洲衛男・馬場禮子・松島恭子 (編), 心理査定実践ハンドブック, 創元社, pp. 458-461.
- 原 信夫 (2004): エゴグラムとの比較による風景構成法の特徴について 清和大学短期大学部紀要, **32**, 29-38.
- 弘田洋二 (1986): 風景構成法の基礎的研究～発達的な様相を中心に～ 心理臨床学研究, **3(2)**, 58-72.
- 弘田洋二・三船直子・原 志津・岩堂美智子 (1990): 「風景構成法」に関する研究(その2)～ロールシャッハテストとの関連～ 大阪市立大学生生活科学部紀要, **38**, 1-9.
- 井原 彩 (1993): 風景構成法と箱庭における空間の表現の特徴について 箱庭療法学研究, **6(2)**, 38-49.
- 石井雄吉・杉山晴子・岩崎麻美・臼井美保子・緒方亜津子 (1999): 風景構成法の数量化の試みー精神科リハビリテーションの目安として 神奈川県精神医学会誌, **49**, 59-64.
- 伊集院清一・中井久夫 (1988): 風景構成法～その未来と方向性～ 臨床精神医学, **17(6)**, 957-968.
- 皆藤 章 (1994): 風景構成法～その基礎と実践 誠心書房
- 皆藤 章 (2008): 風景構成法 福西勇夫・菊池道子 (編), 現代のエスプリ, 別冊 (10月), pp. 152-163.
- 加納信吾・堀 智子・石井雄吉 (2010): 数量化風景構成法との関連からみた風景構成法～数量化風景構成法とGHQ 28 とを用いて～ 神奈川精神医学会誌, **59**, 11-18.
- 神菌悦子 (2011): 青年期の風景構成法作品に表れる人物像と自己像の読み解きについて 神戸大学発達・臨床心理学研究, **10**, 59-68.
- 岸川雄介・南里裕美・西田紀子・正木大貴・上田英樹・福居顕二 (2003): 青年期発症統合失調症患者のロールシャッハ・テストによる思考過程の分析～健康青年との比較において～ 京都府立医科大学雑誌, **112(9)**, 689-696.
- 三浦麻依子 (2003): 風景構成法における人物像の特徴に関する研究 北海道心理学研究, **26**, 23-33.
- 那須秀行 (2009): 風景構成法における付加物について～描き手の体験の語りから～ 佛教大学大学院紀要, **37**, 109-126.
- 大石勝代 (1988): 風景構成法について(1)-P-F スタディとの関連 人間発達研究, **13**, 13-22.
- 澤田和重・内田弘之・宮下久子 (1993): 風景構成法における「人物像」類型化の試み～表現の豊かさや運動性の視点から～ 下呂病院年報, **20**, 19-22.
- 高桑洋介 (2005): 風景構成法とロールシャッハ法との関連～「羅列型」を示した3事例の検討から～ ロールシャッハ法研究, **9**, 38-47.
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博之 (2007): ロールシャッ

- ハ・テスト解釈法 金剛出版
 高橋雅春・高橋依子・西尾博之 (2009) : ロールシャッ
 ハ・テスト形態水準表 金剛出版
 津川律子 (2005) : 包括システムによるロールシャッ
 ハ・テスト 精神科, **6(2)**, 135-140.
 運上司子・橘 玲子・長谷川早苗・中村協子 (2010)
 : 風景構成法における彩色についての考察 新潟青
 陵大学大学院臨床心理学研究, **4**, 19-23.
 鷺岳 覚 (2006) : 風景構成法～青年期女子の心理社
 会的発達課題の検討 青森明の里短期大学研究紀
 要, **32**, 51-69.
 山中康裕 (1984) : 「風景構成法」事始め 山中康裕
 (編), H. NAKAI 風景構成法中井久夫著作集別巻,
 岩崎学術出版社, 1-36.
 吉村 聡 (2008) : ロールシャッハ法とPFスタディ
 による攻撃の方向性に関する一考察 ロールシャッ
 ハ法研究, **12**, 43-50.

*A Study on Objective Interpretation of Landscape Montage
 Technique with The Rorschach-A Comprehensive System- and GHQ*

SHINGO KANO (CENTER OF CLINICAL PSYCHOLOGY, MEISEI UNIVERSITY) AND TAKAYOSHI ISHII (DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY,
 SCHOOL OF HUMANITIES, MEISEI UNIVERSITY) MEISEI UNIVERSITY ANNUAL REPORT ON PSYCHOLOGICAL RESEARCH, 2013, 31, 7-16

Key Words : Landscape Montage Technique, quantification, Rorschach, GHQ